

堀越登志喜物語

団塊世代の

**我が、**

**ライフ・スタイル**

(団塊世代の履歴書)

2006年版

---

# 第一節 幼少

昨年、居合道二段となり、剣道は三段である。オルガンを習いバッハのフーガの技法を勉強している。社交ダンスはワルツが得意だ。

こう書くとまるで仕事などしていないようだが、そんなことは無く、二十八歳の年に始めた広告代理店は、今年で三十期目に入った。だから、私は今年で五十八歳となる。

私は、東京の世田谷で生れた。昭和二十四年十二月の事であるから、正しく団塊の世代である。

今でこそ世田谷も都心に近い高級住宅地だが、当時私が生れた国立第二病院など木造で所々窓ガラスも割れている貧相な建物であり、隣の駒沢公園も掘り返されたままの未造成地で、畑などもまだ残っていておおよそ田舎風情の所であった。

家族構成は、典型的な三世代家族で父方の祖父祖母、父の兄弟が四人、父母、私と弟の十人の大家族だが、当時のご近所どの家もそのぐらいの家族構成でごく普通の家であった。

母は、明治生まれの祖母と三人の小姑に囲まれ、ご多分に漏れず辛い思いをしたようだが、私は長男で初孫でもあり、家族の中で精神的に実に恵まれた育てられ方をしたと思う。

近所には同じ年頃の子供達がいる、家の前の路地で缶蹴りやらメンコやら、遊ぶには事欠かず、誠に幸せな日々であったと思う。

この幸せな日々との別れは、小学校に入学してまもなく事だった。当時の俄かに造成され、あちこち出来始めていた公団住宅に引っ越したのである。

おそらく母が三世代同居家族に耐えられなくなっただけの事だと思う。ただそんな事はそこら中の家庭で起こっており、若い子供連れの夫婦が続々と、其処に引っ越したのである。この事もまた、団塊世代の中では、典型的な社会現象を経験していると言える。

新しい公団住宅つまり団地での当時としては少々モダンな生活が、始まったのである。そんな生活に合わせるかのように小学校の低学年の間は、ヴァイオリンを習わされたのである。勿論友達と遊ぶ時間が削られるのだから嫌でたまらなかった。しかしこれが後年、成人して始めた仕事が楽器関係からスタートすることになるのだが、その事に影響を与えたのかもしれない。

その団地は三鷹市にあったのだが、小学校三年のときに隣の武蔵野市の小学校に越境入学し転校した。越境入学が行なわれ出した走りであろう。優秀と思われる学校を見つけて編入するのだが、近所の小学校にいればこそ、そこそこの成績であったものを、途端に平凡中くらいの成績に下がるのである。

教育ママという言葉が使われ始めたのはこの頃からだと思う。正に母は教育ママであった。五、六年生ともなると、今の塾、予備校の前身のような所に通わされた。無理やり成績を上げるのだが、そんなメッキはいずれ剥れる事になるのである。

それでも小学生の時の嫌な思い出などなく、屈託の無い少年期を過ごせたのは、母が教育ママではあったが、子を可愛がる心根は人後に落ちず、と言えたのだと思っている。有名私立中を受験したりもしたのだが、およそ勤勉な心がけなどと程遠く、母の買い被りと無理な期待の故で、根拠の無いただの夢は実現しない。

## 第二節 思春期

中学校も隣の武蔵野市へ越境を続け、吉祥寺にバスに乗って通った。中学生と言うのは、少年から青年への転換期であり言わば半熟玉子のような不安定であり重要な時期だと思っている。

男の子の場合は、変声期をはじめ身体の変化を通して、性的な興味やら、少しく大人の世界に首を突っ込んだりする、物事に対する興味が最大限に膨らむ時期であろう。

母は相変わらず教育ママぶりを発揮して、今度は東大生の家庭教師など付けてその足りない学力を無理やり押し上げることに、大変熱心であった。

私はといえば、どちらかと言うと成績などはあまり誉められないが、色々な遊びには精通している友達をつくり、グレンミラー・オーケストラを聴きに行つては、ジャズトランペットを練習し、ベンチャーズが大ブームとなればギターを買い込んだ。だが一番心を奪われたのは、ラジオやアンプの組み立てで、秋葉原は正しく聖地の如きであった。中学生の男の子としては、そんな事で頭をいっぱいにしていたのであるから、およそ健全で、健康であったといえよう。

母の足りない学力を無理やり押し上げることへの熱意のおかげで、国立にある都立高校に入学した。

高校生と言うのは大人への入り口の部分と言えよう。もはや両親の言う事など聴かなくなり、バイクの免許を取り、煙草を吸い始め、もともとやる気など無いのだから身に付かない勉強などは放り出した。

一年生になるとすぐに、三鷹市から武蔵野市とは反対側の調布市に引っ越した。同様に団地であったが、高度成長時代の社会風潮に合わせたように少しは広い家となったのだが、3DKと呼ばれる間取りで、これもまた当時の社会現象の典型的な波に乗っていたと言えよう。何処までも団塊世代のレールからは外れそうも無いかのようであった。

私にとって最初に起きた大きな事件は、高校一年生のときのビートルズの来日であろう。入場券の当たるライオン歯磨きを幾つも買った覚えがある。何処からか遂に入場券を手に入れ、日本武道館に観に行つた。暫くはビートルズやらなにやら当時流行りの洋楽を日がな一日聞いていたように思う。

卒業に近づく頃には、すっかりモダンジャズに鞍替えをして、新宿に幾つもあったジャズ喫茶に足繁く通い、煙草を吹かしながら神妙に聴いていたものである。

高校時代の我が身に起きた最大の事件でありその後の人格形成に大きく影響した事は、初恋とその失恋であった。

## 第三節 青年期

一年浪人した後、その甲斐もなく神奈川県小平にある大学に入学した。もともと学力もなく上げ底で高校に入った挙句、受験勉強にはおよそ身が入ら無いのだから、浪人などまるで受験と言う側面から見れば、無駄だったと言える。尤も人生に無駄など無いと考えれば、無為徒食の日々もまた必要なのかもしれない。

ところがである、大学に入った殆どその日からがらりと生活も、態度も変えたのである。隣町にあたる大森野市の朝日新聞の販売店で、住み込みで働き始めたのだ。朝刊の配達だけをしたのだが、朝はとにかく早いし、夜も翌朝の広告折込チラシをセットする仕事があるのだ。およそキレイとはいえない一軒家をあてがわれ、とにかく心細い一言であった。生れて初めて米を砥いで自炊の真似もしてみた。食べ物など置いていないせいか、夜中鼠に耳をかじられ目を覚まし、走り去る鼠を見て肝を潰したものである。

それでも二、三か月もすると慣れて、半年もする頃にはすっかりずうずうしくなり、原付バイクで郊外の農家を回っていたのだが、およそ寝坊をして午前の九時近くに朝刊を配るものだから、一仕事終えた農家のオバサンに、明日の朝刊にしちゃ早いねえーと揶揄されるほどとなった。

この仕事からは実に多くの得がたい経験をする事となった。いっしょに働く同僚には実に色々な人がいて、とても今までの自分からは想像し得ない人にもめぐり会う。

その人は、朝刊を配り終わるとまずはブランデー飲み、いつも少し赤い顔をして酒臭く、そのくせその汚い住み込みであてがわれた部屋にはマルクスやらレーニンやらの分厚い書物が無造作に積まれてあるのだが、その事については遂に話しなどする事も無かった。暫くするとどこか別の販売店に移ってしまい転々としている様子であった。当時は学生運動も盛んな時で、共産党も今と違い活発であり、あちこちでオルグ活動をしているのかな、などと想像したりもしたが、およそ朝から酔っ払っている事とは結び付け難く、そんな人間がこの世にいる事自体に驚いていた。

その販売店には娘さんが二人いて共に新聞配達をしていたのだが、或る日妹さんが配達中バイクで転び、転んだだけなのに打ち所が悪く亡くなられてしまった。ついさっきまで其処に居たのだが、奥の部屋に横たえられていて、実は日常と非日常とは同じ所にある裏と表であるのだが、その事は受け入れ難い事だと言う事を強く感じさせられた。

大学二年になるのに合わせて、鶴巻温泉駅近くの牛乳販売店に住み込み先を変えた。この店は今で言うコンビニのような店と肉屋と牛乳販売店を継ぎはぎしたような店舗で、当時は繁盛していた。

店の裏に木造アパートのような建物があり、其処には店を任されている夫婦が一階に住んでいて、二階の奥に同じ大学の下宿人、私、肉屋を切り盛りしている三十前後の男が住んでいた。

自転車で百数十件の家に牛乳やヨーグルトを配るのだが、近頃都心では見かけなくなった。荷台に二ケース積み、ハンドル左右に大きな袋を下げ、さらに荷台にも左右袋を下げる。曲芸に近いようなもんだが、慣れるとどうと言う事もなくなる。このおかげで、今でもとんでもなく大きく重い荷物を荷台に括りつけた自転車を運転する事ができる。自慢するほどの事でない事は、言うまでもないが。

大学も二年ともなれば、皆すっかり新しい生活にも慣れ、友達もできる訳だから、だんだん箍が外れだらしな生活に成りかねない所だが、私の場合は逆に、嫌でも朝は早く起きるし、高校時代にすっかり放り出した勉強にも熱心に取り組み、まるで修行僧の如き生活をしていた。

専攻は音楽学と言う音楽を学問として扱う学科で、ピアノや声楽の実技もあり、熱心に練習した。音楽の表現には才能を必要とするが、残念ながらまるで恵まれず、それでも練習の成果と言えるのか、卒業の実技演奏では、モーツアルトのオペラのアリアを唄うまでになるのだから、諦めてはいけないのである。

諦めずにコツコツと前に進む事こそが、何かをなし得る唯一の手段なのだ。この事は後年我が人生の信念となるが、この頃の体験を通して学んで行ったのだと思う。

団塊世代としては、学生運動に触れないわけにはゆかない。幸か不幸か我が校は東京の都心の学生運動のような激しく、機動隊とぶつかり合うような事には至らずに終わった。都心から一時間ほど電車で揺られなければならない為か、各セクトのシンパ諸君もそんな田舎に向くヒマがあれば近くの火炎瓶が飛び交い、各セクト同士のつばぜり合いの激しいところに行かざるを得なかったのであろう。

盛り上りに欠けるものの、それでも一夜にして相当にだだっ広いキャンパスに鉄条網のフェンスができたたりして、一時的にはロックアウトにもなったのだから、まあ、それなりだと言えよう。私と言え、なにしろ牛乳配達をする純粋な労働者階級なのだから、付和雷同して何処から差し入れられか解からないメットを被ってデモともいえない、言ってみればのどかと言えるデモ隊の後ろの方で遠巻きに眺めていただけで、私服刑事が住み込み先の牛乳販売店に聞き込みに来たのも当然なのかもしれない。

まるでノンポリでもなかったが、日和見主義者と呼ばれれば、甘んじて受けねばならない体たらくであった。

とは言え今思えば、長髪にメットを被り火炎ビンを投げては逮捕されて友人も、瓶に詰められたガソリンが見事燃え上がる快感に取り付かれていただけに違いないと思える。今あの時いた大勢の「諸君」は何処に居るのであろう。

三年生になると又住み込み先を変えた。さらに隣の伊勢原の駅近くの今度は読売新聞の販売店であった。あてがわれた部屋は、車の通行量の多い道路沿いの事務所であった。木造とは言え事務所なのだから床はPタイルなのだが、其処に布団を引いて寝ると妙なものである。他の配達員で裏にある土蔵に寝泊りしてる者もいた。

静かとは言えおよそここで寝泊りしたいとは思え難いところであった。事務所の寝泊りは前の道を車が通る度に揺れ熟睡出来ず早々に自分で近所にアパートを借り引越しとなった。

さすがに二年半の修行僧が如き生活も、もとより修行僧の心構えさえ無いのだから、いよいよ崩れだしたのである。同級生達が面白おかしく酒を飲んだり、コンパと称して女の子達と仲良くしてるのを横目で見ながら、夜も十時ともなれば寝てしまう生活など本物の修行僧でもない限り、二十歳前後の若者にできる訳が無いのである。よくも二年半の間ほとんど正月休や風邪を引いて寝込んだとき以外は休み無く続けられたものだと思う。今思えばそれなりの信念があり、そうしなければならぬと思う青年に有りがちな思い込みに支えられていたのだと思う。

さすがにそれも限界に達したのか、いよいよそれまでの我慢の憂さを晴らすかのように出鱈目な方向に走り出すのも又必然であったと言えるのかもしれない。

年上の女性と恋に落ちたりもした。がなによりも、有りがちな事だが演劇にかぶれてしまったのである。裏方の音響効果の担当になった。

当時唐十郎率いる赤テントや佐藤信率いる黒テントなど、旧来の新劇人をあざ笑うような新しい劇団が誕生していた。状況劇場の奇怪な男優達が、劇中、不忍池に飛び込んだりしようものなら、アドレナリンが体中を駆け巡り、しきりと興奮するのであった。

演劇熱はますます高じて、俳優も裏方も寄せ集めで、俄かに仕立てられた劇団に参加し、当時共産圏であった東ヨーロッパの国々を巡る旅公演に参加するまでに至った。

ブルガリアを皮切りに、ルーマニア、ポーランド、ハンガリーの主に地方都市で公演をしたのだ。正しく俄か仕立ての旅の一座と言った風で、二十数人の団体なのであるから、気に入るの入らねえーのと言ったツマラナイごたごたから、大道具が公演開始寸前まで届かなかったり、てんやわんやであった。

ハンガリーのブダペストで旅公演も終わり現地解散となった。とりあえず言葉も通じない所では埒も無いので、ヨーロッパならおよその都市からは帰れる航空券を握り締めパリを目指した。列車は、ウイーンやフランクフルトを通過する。もとより懐具合は心もとないのだから儉約に勤めたが、ウイーンは通過するに忍びなく、四、五日滞在し、主だった美術館や宮殿などは観てまわった。

パリは二十歳前後のしかも芸術かぶれの青年にとっては、やはり魅力的な街であった。地下鉄もセーヌもカ  
ルチエラタンもモンマルトルもモンパルナスも、五月の風とマロニエの緑と光の中で、どんな汚い犬の糞だらけ  
の裏道も輝いて見えた。

昼間はガイドブック片手にあちこち歩き回り、夜は地元の酔っ払いにまぎれてカフェでワインをちびちびやっ  
ていると、もう一年も住んでいるような錯覚に囚われ、これからもずーと此其処に暮らすような気分になったり  
した。

ふと入ったサンジェルマンの教会でコンサートをやっていて、バッハの管弦楽組曲の四番だったりして、もう  
それは感極まって全身に鳥肌を立てて感動しまくるのだった。この滞在中に、ノートルダム大聖堂でのオルガ  
ンコンサートを聞いたのだが、後々、といっても三十数年後だが、府中市の市民講座でパイプオルガンを習う  
原点となった。

節約してると言っても、リュクサンブール公園近くの安ホテルにいるのだから、一ヶ月もするとお金も底を尽  
き、めくるめく夢のようなパリの日々はあっけなく終わってしまったのだ。甘い思い出の残るパリだが、後年、冬  
の一番寒い時に再び来た時は、着いた翌日に風邪を引き熱を出して二週間ほど寝込んでしまい、観光旅行す  
る程度の仏語では医者にもかかれず、すごすごと日本に引き返した苦い思いでもある。

大学生生活も最後の年となり、この世にも珍しい、東欧諸国公演旅行での音響効果担当裏方修行の経験が無  
理やり卒論に纏め上げ、声楽の練習に励み、モーツァルトのオペラ、「フィガロの結婚」のアリア「もう飛ぶまい  
ぞ」や山田耕作の「赤とんぼ」を唄って無事卒業した。しかし、普通の学生のように就職活動もしなかったし、又  
就職する気などまるで無かった。



## 第四節 社会へ

西荻窪の牛乳配達店で、住み込みで働く事にした。

朝の配達は学生時代二年半ほど経験していたので、充分にこつは飲み込んでいた。プロの配達員は、そのルートを配達していた先輩なりに一回付いて回るだけで翌日からは一人で二、三百件の配達をこなすのである。それにはやり方があって、大福帳のようなものに配達先を書き入れておき、一軒目への道順、其処から二軒目への道順と言う具合に間だ間だをメモしておくのだ。次から次へと無事に行けさえすれば、難なく最後の軒に到着する事ができる。この技術を私も習得していた。プロの配達員並である。しかしこの事は、後年一度として役に立つ事は無かった。

朝早く起きねばならないが、終わると後は自由になる配達の仕事を選ぶ人達は、何がしかの志を持った人が多かった。このお店で出会った人達もそうであった。

一人は、競輪選手に成りたいと思っている青年で、牛乳を山のように積んだ自転車に乗る事を苦にする様子も無かったが、びゅんびゅん走る競輪自転車と確かに自転車であることには違いは無いが、およそ似て異なる物なのだから、トレーニングになっているとは見えなかった。彼がその後競輪選手に成ったかどうかは定かでない。

もう一人は、牛乳配達員には見えない白のデザインシャツと当時流行りのパンタロンの白いズボンと叫びでたちで現れた、小説家志望の青年である。その垢抜けた格好で配達もするのだ。金など余計に持っている訳など無いのだから、要は着たきり雀である。二週間もすると薄汚てヨレヨレなのだから、ちょっと哀れである。原稿用紙に向かっている所など見た事も無かった。物書きは書いてる姿など人に見られたりするの、まっぴらなのだろうか。それにしても書いたものなど読ませてくれた事も無かったし、その後小説家になったと言う消息もない。

私も牛乳配達が目적ではない。勉強したい事があった。シンセサイザーと言う電気楽器である。数年前に開発された新しい楽器であり当時はまだ大変珍しく、大型のものは個人所有など稀であった。あとは大学の研究室にある程度なのだが、在学中やはり音楽研究室が購入したものを見て何とか操作方法を習得したいと思ったのだ。

まだ日本製のものなど無く、米国のムーグ社と、アープ社のものしかなく、その片方のアープ社の製品をモリダイラ楽器と言う神田にある楽器卸商が輸入販売を始めたばかりであった。早速通いつめ、英文のマニュアルなどを借り操作方法を勉強した。鍵盤楽器は得意ではなくとも人様に聞かせられる力量ではないがまるで弾けない訳でもないのだから、半年もすると、演奏方法を人に説明できるほどとなった。

商売をしている人達はそんな勉強をしている暇など無いのだから、私がいれば何かと都合が良いのであった。エレクトーンなど鍵盤楽器がこなせて、操作方法が解かるミュージシャンなどに説明やデモンストレーションをさせればそれなりのギャラが必要だが、頼みもしないのに通ってくる学生上がりの今でいうフリーターの私は、説明要員としてはうってつけであったろう。残り物の弁当など食べさせてくれて可愛がられたのも最もな話した。

月々の小遣い程度の報酬を貰うようになるのに時間はかからなかった。もともと牛乳配達が好きでなくてもないのだから、半年もやって止めてしまった。その西荻窪の牛乳屋さんには珍しくグランドピアノがあった。毎日そのピアノを弾かせて貰った。小学生の男の子がいて、情操教育にピアノは最適だと吹き込むと、母親はすぐその気になってくれて、その子のピアノの先生を勤めたりもした。

そんな事から、高校時代から両親が住んでいた調布市つつじヶ丘の公団住宅に引き上げてしまった。その頃両親は千葉に分譲住宅を買い引っ越してしまっていた。暫くは弟と其処で暮らすのだが、家賃も安く大した収入も無くても暮らせたのだった。

二十五歳になり一般には既に仕事を定め社会人の自覚を得る頃だが、まるでダメであった。その後一年半ほどは神田の楽器卸商、モリダイラ楽器の販促のアルバイトや、アニメ(ガッチャマン等)の効果音創りで当時築地にあった恐ろしく古くゴキブリが行き交うスタジオに週一で通ったりしていた。

確か映画「八つ墓村」のほんの数秒の音創りで鎌倉の松竹スタジオに行った事もあった。音取り予定時間に一時間も遅刻して行きヒンシュクをかった。

無自覚な訳ではなかったが、行く先の定まらない事に焦る事も無く、何かに縛り付けられる事などまるで無く、振り返り見れば、豊かな時間を過ごせたのだと思う。

翌年になり、モリダイラ楽器の広告を取り扱う、同じ神田にある広告代理店、東広の営業部長から誘われて、モリダイラ楽器が持つギターブランド「モーリス」を担当する嘱託営業マンとなった。

なぜ嘱託かというと、午前中はアテネフランセにフランス語を習いに行くからであった。アテネフランセには一年ほど通ったが、旅行に間に合う程度の片言を喋るようにはなったが、遂にもものにならなかった。

この広告代理店での仕事は、午後からしか出社しないのだが、熱心にマジメにやった。「モーリス持てばスーパースターも夢じゃない！」と言うコピーのスポット広告を深夜ラジオ番組の「オールナイトニッポン」の中で流すのだが、当時、その世代の若者には、結構浸透していたように思う。

後に広告代理店を創業するのだが、この仕事を通じて、短い期間に広告代理店に必要なあらましを学んだのだから、感謝して余りあるのだ。その後菓子折りを持って挨拶に行つてのいないのは、少なからず同業ゆへの競合があり、後ろめたい気持ちがあるからであろう。多分気にもとめてもおられないのだと思う。こちらの自意識過剰である。

一年半ほどたった昭和五十一年の暮れになって、上司の営業部長が独立するので、やはり誘われたのだが、ある程度の顧客を持った独立は、色々な兼ね合いからそう簡単には話しが進まず、私は宙ぶらりんとなってしまった。

そこで、年も明けた翌年の最も寒い二月に、研いても光らないフランス語の実力を試そうと渡仏するのだが、ホントに寒いパリに着いたその日に風邪を引き、二週間寝込んだ挙句日本にすごすごと引き揚げたのだ。

この時、パリのフランス人は冷たいと思った。そもそもフランス人は顔のぺったんこな東洋系のアジア人を見ると「シノワ(中国人)」かと言う。あれから三十年も経つが、フランス人は、「ジャポネ」と「シノワ」区別がつくようになっただろうか。そんな事はあるまいと思う。

この時パリに当時安かった南回りの飛行機で行つたのも良くなかつたのだ。羽田を発つと次はマニラに止まり、次はバンコクに止まり、次はラワルピンジー(パキスタン航空だから)、そしてカイロ、最後によくフランクフルトを経てパリに三十時間近くもかけて到着するのだが、やたら暑い所で休憩ばかりしてから、すつごく寒い所に着くのが良くなかつたのだと思う。帰りもこの逆を辿るのだから結構手ごわいのだけれど、色々な事件も起きて、急がなければ苦にはならない。

## 第五節 創業

昭和五十二年の四月に株式会社堀越を設立登記した。それまで碌な稼ぎも無かったが、それよりも使う事も無かったので貯まった百万円が資本金であった。

神田東松下町に今では想像もつかない一坪ぐらいの、机一つしか置けない事務所を借りた。出かけての間は、電話を切り替え式にして大家さんの事務所にいる事務のおばさんに取ってもらった。窮スレバ通ズ、とでも言うのであろうか。

埒があかないために始めてしまったような創業で、それなりの覚悟が無いわけでは無かったが、自分一人の面倒さえ見れば良いのだから、誰に何かを言われるでもなく、まるで緊張感などなかった。

だがその事は、裏を返せば、誰も何も教えてくれないのだから、まるで社会常識に欠ける不出来な社長の誕生でもあった。我儘勝手にわが道を進む事は出来ても、我が身を客観的に見ることは至難の事で、教わらねばわからぬ事も多く、未だに自分の不明を恥じている。

最初の三年ほどは、以前お世話になった楽器卸商や楽器小売店などから、カタログの制作や雑誌広告、ラジオCMなどを受注し、大した売上も無かった。

なにしろ経費と言っても、いくらなんでも狭いので少し広い部屋に引っ越したのだが、三坪ぐらいの同じ建物の中の事務所家賃ぐらいなものなのだから、生活する分には困りはしなかった。

三年ほどは何も解からぬまま見よう見真似で、金融機関との取引やら法人の決算やらも手探りであった。将来結婚の約束をした女性に電話番号やら経理処理など手伝ってもらいながら暗中模索と言った所であった。

その女性とはご両親との挨拶も済ませ既に一緒に暮らし始めていたのだが、我が母親との折り合いが悪く、その後別れてしまう事になる。

最初の何もかも初めてで初々しかった気分も無くなり、だらけ始めた頃に最初の転機が訪れた。

リットーミュージックと言う楽譜出版社が、キーボードマガジンと言う月刊誌を創刊した。その出版社の社長とは以前より懇意にしており、私の方はシンセサイザーなどと言うキーボード系の楽器には結構詳しいのだから、すぐに意気投合し広告集めに協力する事になった。

協力関係にある出版社が出来て、仕事が増えだし、人手も必要となり知り合いの若者を雇い入れたりし、やっと会社らしくなった

昭和五十六年九月、事務所は神田須田町の大通り面した新築のワンルームマンションに引越した。以前とはえらい違いである。

この事務所には一級建築士をしていた弟が、勤めていた事務所を辞めて、仕事は違うが共同事務所のよう  
にして働いていた。

仕事に接点は無くは無かったが、共同経営者と言う訳でもなく、上手くゆかず直ぐに袂を分けてしまった。ま  
だ互いに若く、お互いの立場や違いを飲み込む度量に欠けていた。深く悔いているが時は戻りはしない。

この事務所は、小さなワンルームに五人働も働いていた。後に最初の妻となり、娘二人を儲ける事となる経  
理事務員、私と弟、営業の若者二人である。直ぐ手狭になり翌年には引っ越してしまった。

同じ神田須田町だが、万世橋近く神田川沿いのビルの二階で十五坪ほどの事務所である。経理の事務員  
やグラフィックデザイナーの女の子など雇い入れ小規模ながら会社のようになった。昭和五十七年の事であっ  
た。

協力的であった出版社のリットーミュージックは、その後も次々と音楽雑誌を創刊し素晴らしい勢いで発展し  
ていった。おかげで、我社もその後五年ほど順調に発展し、年商二億円を超えるほどに成長した。一時は二階  
だけでは足りず、五階も借り増したりしたのだが、必ず成功は失敗の元であった。

家族の様に仲良く楽しく働きましょう、なのだから仕事としてはいたって甘く、ただ来る注文をこなすだけなの  
だから、競合になど勝てるわけがなかった。

毎年伸びてきた売上も伸びなくなり、遂に前年を割る事態となった。借りました階を引き払い狭くなった事務  
所で体制を立て直さねばならなかった。

マネージメントなどさっぱり解からぬまま、リーダーを育成し営業を強化せねばと、ようやく本格的な経営課  
題と直面する事となった。

この頃に二番目の転機に遭遇することになる。

---

## 第六節 発展

ソニー系の音楽雑誌出版社が、バイクブームによってバイク雑誌を創刊したのである。

それまでは、楽器業界の中だけで、専門の広告業として売上を伸ばしてきたのだが、初めて取引先の出版社が異業種に向けて雑誌を創刊したのを機に、業界密着型の広告業でありながら他業界への進出を試みたのだった。新たにバイク業界で仕事を始めるのは、それまでの一切の人脈も使えず、又営業マンを育てるスキルも全然無く、苦労の連続であった。しかしこの壁を乗り越えた事が、後に現在の会社に発展する上での重要なターニングポイントとなった。

ツーフロアをワンフロアにした事務所は直ぐ手狭になり、平成三年九月に外神田の末広町交差点近くに移った。事業年度としては十五期目となっていた。

しかし売上は伸び悩み年商で二億台に留まり続けた。他業界への参入は簡単には行かず営業マンは直ぐ辞めてしまい、成果を上げられずにさらに三年ほど苦戦しつづけるのだが、それでも少しずつ客先も広がりだし、平成六年度にやっと年商が三億円を突破する事が出来た。

従業員数も二十人を超えた。この楽器業界専門の広告業から脱皮するのに十年近くの年月を費やしてしまったが、それが出来なければその後の拡大は無かったのだろうから、無駄であったとは考えないようにしている。

この頃、平成四年から五年にかけてだが、それまでに無い経験をした。

裁判所での原告、被告の争いである。訴えられる訳ではない。債権回収のために相手を訴えるのである。

広告代金の未払いに対し相応の手段で解決しない場合は、支払い督促と言う裁判所型の通告を出すのだが、相手方が異議を申し出ると裁判に移行する。

債権額が百万円を越えると地方裁判所の管轄となる。

相手は原宿にあるギター工房であった。代理人の先生、つまり弁護士を立ててきた。

勿論初めての事ゆえさっぱりわからない事だらけなので、弁護士を紹介してもらい依頼した。先方の先生は、六十歳前後のベテランの先生で、こちらはある弁護士事務所に勤めるこれからと言う感じの若い先生だった。そのせいでもあるまいが、百万円ほどの広告代金は、そんなものは契約した覚えもないと否認され、又裁判官もその言い分を聞き入れた判決を出し、あっけなく負けてしまった。

頼まれもしない広告を出して代金を請求するなど、詐欺みみたいな商売をしてる訳はないのだから、本当に腹立たしく、今度は弁護士の代理も立てずに、高等裁判所に控訴した。

百万円ほどの売買代金請求事件を高裁に控訴するなど、例え勝訴しても、弁護士費用でおよそ無くなってしまふのだから、およそありえない事なのであろう。裁判官は幾らか私に同情的で、しきりと和解を勧められ先方も折れて二十万円ほどで和解した。

この件は、実に多くの教訓を得る事が出来た。その後何度も裁判所に足を運ぶ事になるのだが、債権債務については、全て弁護士に依頼せずに済ませている。契約の有無やキャンセルによる契約解除の有効性を争うのだが、用意すべき書式も同種のもが多く、まねをすれば自分でできることなのである。まして少額であれば回収しても弁護士の費用のほうが高いかもしれないからである。

時として裁判によって解決する事は、特に事業に於いては、有効な時がある。

最近になって、会社を辞めた営業マンが客先を持っていってしまう事件が起きた。

競合禁止の仮処分申立を行い、無事阻止する事が出来た。契約によって事業が成り立っているのだから、法律に明い事は重要である。

平成六年十月に神田小川町の靖国通りに面したビルに移り、営業のチームも楽器、バイク、パソコンの各業界を担当し、グラフィックデザイナーも五人ほどに増え、社内は四チーム体制になっていた。

業界密着型の専門広告業でありながら、他の業界に参入するには、営業のやり方を標準化し、提案を企画化する必要があった。

企画書をツール化し、新規参入の為に雇い入れた新人が営業しやすい仕組みを作る必要があった。営業プロセスの標準化が異業種に展開する為の最重要課題なのである。

この事は、特定の業界に精通してプロ化することと反対のベクトルを持つ為、自己矛盾を感じて事業化しにくいのだが、業界を深堀する縦軸とは別に、仕事を標準化する為の横軸をまったく別な視点で見ればよいのだ。

しかし、一度身につけた業界情報がその事の理解の妨げとなる。

とにかく営業手順のマニュアル化に努力した。その為ばかりでもないだろうが売上は順調に伸び、平成八年には神田駿河台に事務所を移転し、その期の年商は六億円を越えるまでになった。営業する業界は楽器やバイクの他に、ファッション、アウト・ドア、美術などのマーケットなどに広げる事が出来た。

これらの業界の中で、美術マーケットの仕事が出来た事には特別な思い出と感慨がある。

当時は、バブルがはじけるなど誰も思ってもいなかったし、その渦中にいるのだから、それがバブルだとも思っていなかった。

美術の世界でも、オークションでゴッホの絵画に数十億の値段が付いたりした。

活発な商いを反映して、日本経新聞社の子会社である日経BP社が、「日経あーと」と言う月刊誌を創刊した。

その広告取りの営業を私自身で熱心に行なった結果、数社の画廊や古美術商と取引する事が出来た。

その中に、繭山龍泉堂という日本橋の古美術の名店があった。

当時社長は、高橋三朗氏であった。ちょうど親子ほどの年周りであったが、出入り業者の私を、随分鼻屑にしていたように思う。

以前より陶磁器、つまり焼き物は好きであった。それが、東洋陶磁器の名品中の名品を数多く手がける、普段はとても足さえ踏み入れない名店に足繁く通うようになったのだから、それはもうたまらなかった。

商売として、儲かればなどという気持ちなど微塵も無く、本当に面白くてしょうがなくて仕事をした。その事を少しは高橋社長も感じてくれたのだと思う。

広告に掲載する品物は、逸品ばかりであった。明朝万暦五彩の小振りな皿は頬擦りしたいほど華麗だった。殷の青銅器の爵。唐三彩の万年壺。

思い出すだけで、眩暈がしそうな一流品ぞろいであった。店の地下の図書室にはふんだんに資料があり、調べ上げるのにも事欠かず、又必要があれば大学の教授らの専門家にその品物の出自を問うのである。古美術、特に東洋陶磁の勉強としては世界のトップクラスであった。何という贅沢であろうか。コレクターであれば何億円も注ぎ込まねば出来ない勉強をさせていただいた。

その中に清朝康熙五彩の首が鶴のように細い特徴的な瓶があった。美しく印象的であった。近年、箱根に出来たポーラ美術館で再びめぐり会った。まるで昔の恋人に街で突然再会したかのように心ときめいた。「貴女はこんな所にいたのですか」と。

その他にも、お客様から預けられて、人目を憚るような品物まで見せていただいた。それはもう、至福のときであった。今でもこの仕事によるめぐり合わせは、心から感謝して余りあると思っている。

その後社業の方は、人を育てるのには時間が必要で、又三年ほど足踏みすることになる。

創業以来の業績を振り返ると、足踏みをする停滞期とすーと伸びる成長期を繰り返してきた。それは三～四年の周期ではあるのだが、まるで竹の節か、昆虫の変態のようで、その繰り返しによって、時代から取り残されないようにしてきた結果だと思っている。

平成十三年には、以前借りていた神田小川町のビルの広いフロアに移り、事業年度の年商は十億円を超える事が出来た。従業員数も五十名を越えた。ところがである、此処三年ほど又停滞しているのだ。

1990年代のバブル崩壊の影響は特定の業界を複数扱う事によって、その影響を免れる事ができた。



日本経済全般の影響よりも、各業界ごとの業況による影響の方が優先されるからである。特定業界密着型であるため、大型クライアントを持ちにくく、客先シェアは分散されてる上にさらに業界も七〜八業種を取り扱う為リスクはきわめて分散する事が出来た。勿論その見返りとして、細かい客先に忙殺されるのだが。

バブル崩壊の最終章であるデフレスパイラルの中で、次の時代に着いて行く為の仕組みは果してどのような答えを用意しなければならないのか。

いつも節の時節を迎えたときはもがき苦しむ。この2004年と言う時が求める答えは何処に見出せるのであろうか。インターネットが日常化し、何百年に一度の産業革命以来の、大転換を時代は要求しているのかも知れない。

時代の波に合わせて変化し脱皮する事が出来なくなった時こそ、企業がその命を失う時である。戦後の高度成長期のバックボーンとなってきた金融機関の再編を見るまでも無く、消費者の価値観は大変革を起こしている。果して次の時代を照らす灯明は何処にその芯を隠しているのだろうか。



## 第七節 人生

五十五年の人生の中で長く続けられた事といえば、自ら起こした会社であった。

人生に起承転結があるとするならば、その承の時節のほとんどを自社の経営に充てたこととなった。

その間に、草創期に会社を手伝って貰った女性と結婚し、二女を儲けた。

後に離婚し、再婚する。

再婚した妻とは、一男一女を儲けた。

共に、少なからず苦勞をかけた。償わねばなるまい。

両親のおかげで今日こうしていられるのは当然の事だが、およそ、その恩には報いていない。共に八十歳前後だが、この体たらくで報恩しえるのだろうか。

五十歳を過ぎ、いよいよ人生の収穫期を迎えねばならぬ今、いかに生きるべきかと改めて問うている。

ただひたすら会社に身を置き、あくせくと終わってしまっただけで良い訳が無いであろう。

充実した素晴らしい人生であったと死ぬ時に振り返れねばならない。

冒頭に書いた、居合や剣道、オルガンやダンス、俳句の会に顔を出したりもしているが、それは、この事の為の準備だと思っている。

仕事の手を離せるようになって、多くの人の場合退職してから何かを始めたのでは遅くは無いだろうか。年を取り、目や耳が衰え、体力気力も衰えてからでは遅いように思う。

趣味が仕事に置き換わるのではない。自分の精神とかかわる道が必要なのだかである。自分の精神を研ぎ高める道とは、何であろうか。修行か。芸術か。

お金儲けや会社の売上、様々な契約やらその違反との争い。そんな事からは開放されて、自由で、平和で、幸せな日々。いったい何処にそんな世界への扉が開いているのだろうか。

この先の我が道は、正しく我が身を、行くべき世界へと導いてくれるのだろうか。

否、間違った道を歩んでいるのでは無かろうか。

五年後には、その答えと向き合わねばなるまい。

正に、渾身の力を振り絞って「狭き門より出でよ」である。

